1971　昭和４６年７月１２日発行　　鶴研
雑誌　平凡パンチ　7/12

ロマンチックな日本人

東映監督・小沢茂弘

鶴さん。あえて鶴さんと呼ばせていただく。わたしが鶴さんとコンビを組んで撮った作品は 20 数本。もう 10 年にもなんなんとするあいだ、まったく変わらぬ友情をもって喜びと苦しさをわけあってきた。世に畏友という言葉がある。鶴さんは、まさにわたしにとって畏友である。作品の点でまた処世のうえで教えられ、敬発され、鼓舞されたことは数えきれない。鶴さんは、わたしの誤まりを適確に指摘してくれる。ごくさりげない一言が、わたしをはっとさせる。

鶴さんはよく「わたしは映画俳優の鶴田です」という言葉を使う。「わたしはプロですから」ともいう。この言葉は鶴さんの日常の心がまえでもあるようだ。日本映画界で、この人ほど自分が映画俳優であるということに徹している人はいないだろうと思う。徹すれば徹するほど、その道はきびしい血を吐くほどの苦難の連続であり、喰うか喰われるかの争闘の毎日である。だが鶴さんは、そのきびしさを深く内に秘めて、外にはけっしてあらわさない。

鶴さんにはじめて接した人は、おそらくその胸に秘めたきびしい闘志を察知することはできないだろう。逆に鶴さんは、きわめてユニークな態度で人と接する。必らずある程度の余裕をもって――余裕があるからこそ、ユニークなのかもしれない。この鶴さんのユニークさに面くらう人もいれば、ときとして誤解する人もあるかもしれない。だが、話しあい長く付きあっていくにつれて、カチンとした男の本質にふれ、電気に打たれたように認識を新たにするはずである。わたしなどのような、単細胞の人間にはまねすることもできない魅力ある風格である。鶴さんが畏友なるユエンはここにもある。

鶴さんは映画俳優であるまえに、きわめてロマンチックな日本人である。日本の風土を愛し日本の国を愛すること此をみない。そして情にあつく意気に感ずる男の中の男である。この人間的魅力のうえに、執念ともいえるプロ意識そしてこのユニークな表現力。鶴さんが映画俳優として日本一にランクされる理由はここにあると思う。

人間の運命には何かがある。つかないこともあり、努力しても思うにまかさぬこともある。だが鶴さんは、いまや昇り龍である。その好調さがカラダ全体からうかがえる。その血色のいい、さえた顔はまったくほれぼれさせる。まだまだお互いにがんばらねばならない。来年にはぜひとも念願の「ラモーの砦」[1]の映画化を実現しようと話しあったばかりである。畏友よ！　ますます元気で活躍を祈る。

---

[1] 鶴田浩二が晩年まで制作に執念を燃やした映画である。